

大正十三年（一九二四） 木彫
二一・六×二七・七×四七・〇

一点

鑄物師が灼熱の炉の中から溶けた金属の入った坩堝を引き上げようとする姿を、鑿跡を荒々しく残した木彫により量感豊かに表した作品である。基台の正面に刻まれたドイツ語は十八世紀ドイツの詩人シラーによる「鐘の歌」の一節。職人たちが鐘を造り上げていく工程を眺めながら、詩人が人生について、青春や結婚、家庭、社会などについて思いを巡らせていくという長い詩の中で、鐘の地金のために金属を溶かして合金を作る場面にあわせて結婚について表した「なぜなら、硬いものと軟らかいもの、強いものと優しいものがつがうときに、よい響きは生まれる」（内藤克彦『シラー』清水書院、一九九四年）の詩文が刻まれる。本作は、大正十三年の皇太子（昭和天皇）御結婚に際して貴族院より皇太子に献上された品で、この御結婚に寄せて、

作者の新海竹太郎（一八六八〜一九二七）がシラーの詩に祝意を重ねて制作したと考えられる。基台の背面に「帝室技芸員新海竹太郎作 大正十三年」と刻まれる。

新海は山形に生まれ、明治十九年に軍人を志して上京、後に後藤貞行に師事し、小倉惣次郎に塑造を学んだ。明治三十三年に渡欧しパリを経てベルリンでアカデミックな彫刻技法を学んで大きな成果を得た。帰国後は太平洋画会の彫刻部を主催、明治四十年第一回文展では審査員を務め、代表作《ゆあみ》を出品。その後は塑造と木彫の両方を手がけながら様々な題材を取り上げ、表現の可能性を探って幅広い制作活動を行った。大正六年には帝室技芸員に、同八年には帝国美術院会員となった。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

1920s-30s モダン・エイジ — 光と影の造型美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 70

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十七年九月十二日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shozokan